

他人の人生を感じ取るということ

——『嗚呼 満蒙開拓団』を観て——

吉家 京子

中国残留日本人孤児の人達が、また肉親を探しにやってくる。

どんなにか大変な人生を送ってきたことだろうと思いつつも、私は顔を背けたくなくなる。自分の頭と心の中に、なんとも嫌な距離感があるからだ。「ひとごと」として捕らえている自分が嫌になるのだ。

世界史を勉強しているとしよう。「民族大移動だって？それが何なの？」学生時代の自分は、そんなだったと思う。しかし、一昨年アイルランドに行ってから、ヨーロッパの民族移動は、突然私の中で色、形を得て動き始めた。「ケルト」が好きになったからだ。今、私はアイリッシュの笛を吹きながら、ケルトの人達の歴史を感じ取ろうとしている。

過去の出来事が突然命を得て、自分の中で動き始めたという、こんな体験もある。息子が小学校6年生の7月、学校から帰るなり、「広島原爆記念館に行ってみよう。」と言った。どんな授業を受けてきたのか、「こんな先生に受け持っていて、息子は幸せ」と感じていた私は、その先生が投げかけてくださった一粒の種を大切にしたい。翌日、新幹線の切符とホテルを予約して、その翌日には二人で広島へ。そして原爆記念館に直行。息子はその夜、食事が取れなかった。そして一泊して、私はもう一度資料館に向かった。「お母さんは多分ここにはもう来ないと思うから、もう一度見ておきたいの。外で待っていてくれる？」息子は「ウン」と言ったが、結局一緒について来て、前日より時間をかけて見ていた。何か新しいことを学んだのではない。ただ、原爆が本当に落とされて、多くの人々が死んだり、苦しんだりした（あるいは、苦しんでいる）ことが、「事実」として認識され、心の中の「原爆」の質がすっかり変化したのだ。

物事を本当にあったこととして、全身で受け止められるかどうかは、何で決まるのだろうか。自分で体験したことは、よく分かる。自分にとって大切な人のことは、全力で分かろうとする。しかし、アフリカのことは？ アラブは？ 生涯かかっても果たせない宿題をかかえて生きている。

『嗚呼 満蒙開拓団』を見た。ずっしりと重かった。体験談は重い。悲惨な記憶を抱えて生きてこられた方々の、人生の重さを思う。そして、私の心の扉は、この映画によって開かれたと思う。これから中国残留日本人孤児のニュースを見るときは、顔を背けないばかりではなく、食い入るようにテレビに噛り付くと思う。

私はこの映画を観てから、会う人毎に「嗚呼 満蒙開拓団」は、素晴らしい映画で、羽田澄子さんは素晴らしい方だと思う、と伝えた。でも、その後観たという話は聞かない。何人

かが「観たかった」、と言ったけれど。私が岩波ホールで観たときも最終回だったせいもあるかもしれないが、観客は少なかった。そして、年配の方が多かった。体験者らしい方が、深く頷きながら観ていた。でも、本当に観て欲しいのは、若い人たちだ。若い人たちの未来に、過去と同じ悲惨が降りかからないように、学んで欲しいのだ。しかし、それとは逆に、人の痛み鈍感な空気が蔓延しているのではないだろうか。いつか自分や自分の大切な人の身に降りかかってくることなのだけど。

大原穰子さんという方言指導・女優をしている方がいる。大原さんは、日本国憲法を、お国言葉（大阪、広島、愛知、青森）で、その土地の普通の人々が普通に話すように、憲法の難しい用語を「翻訳」して読んでいる。それによって、「えっ、そうだったの！」と気づくことがあるはずだ。「・・・どが一な理由があろうとも、戦争は絶対にこれからあ、やらんということを誓うたんです」と聞かされれば、「そう、そう。」と思うではないか。こんな、大切な「憲法」に命を吹き込むような仕事をする大原さんを、私は素敵だと思う。

羽田澄子さんは、素晴らしい映画をつくられた。私たち、それを観た者は、その素晴らしさを伝える役目があると思う。そして、生きた言葉で、それを伝えられるよう、心を砕いていきたいと思う。

（よしいえ・きょうこ：ホームスパン作家。羊の毛を、染色、手紡ぎ、手織りによって、壁掛け、ストールなどを制作。東京都内や札幌のデパートを中心に、作品を発表している）